『胎動』と『妊婦のこころの変化・産科合併症』との関連についての検討：母親に寄り添った保健指導をめざして

金澤 由紀子　●名古屋市立大学 医学部附属西部医療センター 産科病棟 助産師



胎動研究の助産師メンバー

要旨

本研究において、母親に寄り添った保健指導を目指した妊娠期間の『胎動』と『妊婦のこころの変化』との関連について検討した。分娩予定の妊娠12週以降の妊婦を対象に、妊娠期間中最大15回の自記式アンケート調査と、診療・健診録から臨床情報を収集した。胎動の自覚と、胎動を感じた時の「気持ち」を経時的に要約し、初産婦と経産婦で比較、測定点ごとの「気持ち」への関連因子をロジスティック回帰モデルにて推定した。妊娠中期の「痛い」の要因は、「年齢」で、「くすぐったい」は「回転運動」であった。

妊婦218名を対象に行ったアンケート調査では、胎動を感じることで幸福感を抱くが、妊娠期間中胎動の変化とともに感情も変化することが明らかとなった。妊婦の心の変化に伴った心理的援助や保健指導が重要であることが示唆された。

1. 背景と目的

胎動は医療機器を使わない胎児の健康状態を知ることのできる指標のひとつである。しかし、胎動に起因すると思われる妊婦のメンタルヘルスケアは確立されていない。本研究では、母親に胎動についての知識を正しく伝えることで、自分自身で胎児の異常の早期発見につなげる。助産師による母親に寄り添った保健指導の確立を目指し、地域の周産期医療や妊産婦のメンタルヘルスケアへの貢献を目的とした。

2. 活動の方法

研究デザイン：前向きコホート

対象：妊娠12週以降の妊婦　初産婦96名　経産婦116名

調査方法：胎動における気持ちの変化や、胎動の自覚妊娠週数、回数などを収集できるようにデザインした質問票を研究者がオリジナルに作成した。

評価方法：カテゴリカル変数は割合をパーセントにて、連続変数については、中央値（四分位範囲）または平均値（標準偏差）にて要約した。

収集したデータを初産婦と経産婦とで2群間比較をする。比較は、分散分析にて評価するとともに、カテゴリカル変数はカイ2乗検定またはフィッシャーの正確検定を、連続変数はMann-Whitney's U検定にて2群間を比較した。

3. 現状の成果・考察

【結果】初期に感じた胎動は、初産婦は「蹴

図1 初産婦・経産婦別の胎動の経時的変化

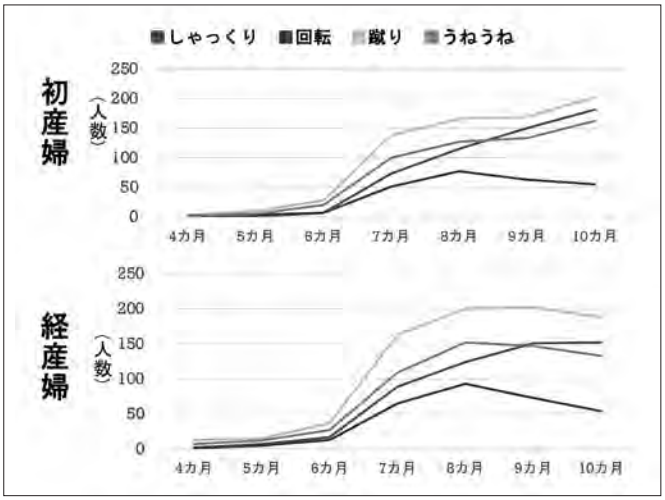
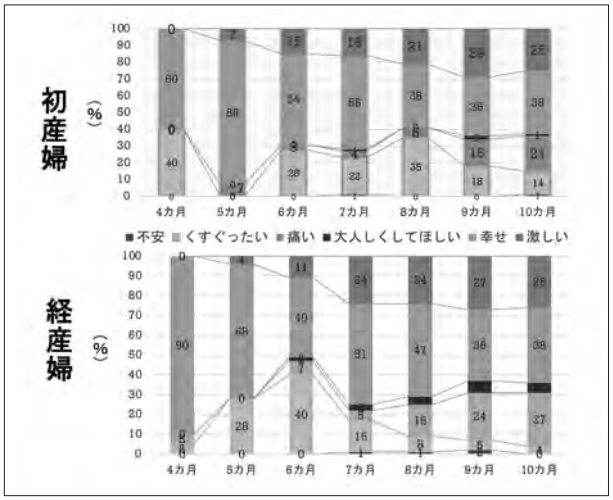


図2 胎動を感じた時の気持ちの割合の推移



り」(41.7%)、経産婦は「ウネウネ」(51.8%)が最も多く、中期では両群ともに「蹴り」が94%を超え、後期は「しゃっくり」が上昇した(初産婦 89.5%)(図1)。胎動を感じ始めた初期には「幸せ」が最も多く(68.5%)、初産婦より経産婦が有意に多く(p=0.012)、中期～後期には、「激しい」「痛い」が増加した。妊娠中期の「痛い」の要因は年齢で、「くすぐったい」は「回転運動」が要因であった(図2)。

【考察】胎動を感じ始めた妊娠初期・中期は初産婦・経産婦ともに「幸せ」が過半数を占めたが、胎児が成長･発達することにより「大人しくしてほしい」や「痛い」「激しい」などの妊婦自身の身体的・精神的な愁訴に思いが移行することが示唆された。胎動を感じることで幸福感を抱くが、妊娠期間中胎動の変化とともに感情も変化することが示唆された。

【成果】

1) 胎動ハンドブックの作成

本研究で得られた結果をもとに胎動ハンドブックを作成した。妊娠期に応じた助産師からのコメントを掲載した。日頃から母子手帳と一緒に持ち持ち歩けるよう配慮しコンパクトに作成した。

2) 胎動ハンドブックの反応

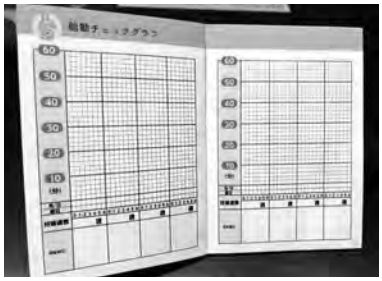
「胎動ハンドブックが胎動を気にする良いきっかけになった」「胎動の日頃の回数が把握できた」と妊婦の反応が聞かれた。助産師側も「胎動を意識する妊婦が増えた」「胎動減少の際、比較がしやすい」との意見が聞かれた。

4. 今後の展望

産科合併症との関連についてデータが不足し解析まで至らなかったため、さらなる解析が必要と考える。また、胎動は母親の意識に左右されるため、胎動に対する母親の保健指導の継続が必要と考える。



作成したハンドブック


胎動チェックグラフ


胎動チェックグラフ見本


胎動の保健指導をしている様子